



楽しいプールの季節になりました。プールや水遊びを満喫する子どもたちですが、毎年この時期は、夏に流行する感染症に気をつける必要があります。また、熱中症にも十分気を付けて対策を取っていくことが大事です。暑さで疲れもたまりやすく抵抗力も落ちていく季節ですので、栄養と休息を十分とり、夏を乗り切っていけるように頑張りましょう！

園長 江郷勝哉
看護師 高瀬浩子

< 6月の感染症 (5月20日～6月20日) >

溶連菌感染症 乳児 1名
流行性耳下腺炎 幼児 1名
咽頭結膜熱 (アデノウイルス) 乳児 1名

● 0歳児クラスは発熱・下痢症状でのお休みが多かったです。

7月の身体測定予定

1日 (月) 幼児クラス
4日 (木) 乳児クラス

< 歯科検診の結果：今年は昨年より虫歯が増加！！！ >

6月に実施された歯科検診の結果は下記の通りです。虫歯のあるお子様の人数、本数とも、昨年より増加しています。

特に幼児クラスのお子様の虫歯の本数の多さが目立ちます。虫歯があると診断された方は必ず受診して下さい。お子様の歯を守るのは、なんといっても保護者の方々です！夜寝る前の仕上げ磨きは、特に重要です。必ず仕上げ磨きをしてあげて下さい！

< ～「虫歯・虫歯になりそうな歯」のあるお子様の人数～ >

● 0歳児：0名 ● 1歳児：0名
● 2歳児：2名 クラスの 8.3% (虫歯・虫歯になりそうな歯の合計・・・2名で7本)
● 3歳児：4名 クラスの 18.2% (虫歯・虫歯になりそうな歯の合計・・・4名で6本)
● 4歳児：6名 クラスの 24% (虫歯・虫歯になりそうな歯の合計・・・6名で27本)
● 5歳児：6名 クラスの 23.1% (虫歯・虫歯になりそうな歯の合計・・・6名で27本)

< ～歯科受診についてのお願い～ >

歯科検診で虫歯があったお子様には、受診のお願いをしています。まだ、受診していない方も多くいますので、早めに歯科医院を受診して下さい。また、保育園に受診結果の書類の提出をお願いいたします。また、当日お休みして、検診を受けていないお子様も多くいます。歯科検診を各個人で受けて頂き、保育園への書類の提出をお願いしておりますので、よろしくお願いいたします。

< 気をつけよう！夏にはやる病気 >



流行性角結膜炎 (はやり目)

原因 目とまぶたの裏側を覆っている結膜にアデノウイルスが感染して起きる炎症。ウイルス性の結膜炎の中でもっとも感染力が強く、タオルの共有や手指の接触によって感染する。最近は季節に関係なく発症する傾向がある。

症状 まぶたのはれや異物感、痛み、充血。目やにで目が開けられなくなったり、発熱や下痢を伴うこともある。

対応 完治まで2～3週間かかり、結膜炎の症状が消失してからの登園になります。医師の意見書が必要です。

咽頭結膜熱 (プール熱)

原因 アデノウイルスによる飛沫感染。「目やに」や便からうつることも。プールの水を介して感染することがあるので、「プール熱」と呼ばれる。

症状 39℃以上の発熱とどの痛みがあり、目のかゆみ、痛み、充血、涙など、結膜炎のような症状が出るのが特徴。

対応 症状がなくなってから2日経過したら登園可能。意見書が必要です。自宅で安静に過ごしましょう。



とびひ

原因 虫刺されや湿しんをかきむしったあとに黄色ブドウ球菌が感染して起こる。症状がどんどん広がっていくことからこの名称で呼ばれる。皮膚が弱いとかかりやすい。

症状 皮膚に水ぶくれができ、破けて赤くむけたような状態になる。発熱することもある。

対応 主な治療法は抗生物質の使用だが、衣服を清潔に保つこともたいせつ。患部をガーゼなどで覆って登園するように。また、患部がじくじくしているときは症状が悪化しやすいので、プールには入れない。

ヘルパンギーナ

原因 コクサッキーウイルスA群などに飛沫感染することで発症。

症状 高熱、のどの痛みが特徴。のどに水ほうや潰瘍(かいよう)ができて痛みがひどく、乳児の場合はミルクが飲めなくなるほどに。

対応 熱やどの痛みがあるうちは、安静に過ごすように。保護者の書いた登園届が必要です。



手足口病

原因 コクサッキーウイルスやエンテロウイルスによる飛沫感染。

症状 手のひらや足の裏、口の中に小さな水ほうや赤い発しんができ、熱が出ることも。

対応 まれに髄膜炎などの合併症を起こすことがあるので、頭痛やおう吐を伴う発熱が3日以上続くときは、すぐに受診を。登園届が必要です。



水いぼ

原因 ボックスウイルス群が原因。タオルやビート板の共有、体の接触などで感染する。

症状 粟粒大のいぼが胸や腹、わきの下などにできて広がる。

対応 完治まで半年から1年半程度かかる。自覚症状がなければ治療は不要。肌のバリア機能が低下しているときや、かゆくてかきこわしてしまうようなら、医師と相談のうえ、いぼを取ったり、薬による治療を行うことも。

